

ケンタウルス

NGC 4755

みなみじゅうじ

石炭袋

りゅうこつ座 η (イータ) 星

IC 2602

りゅうこつ

宮澤賢治 生誕120・130周年記念連載

銀河鉄道の夜空へ 九 (最終回)

Al Nokta ĉielo de la Galaksia Fervojo

りゅうこつ区 みなみじゅうじ区

文：渡部潤一／「銀河鉄道の夜空へ」制作委員会 写真：飯島 裕／長谷川哲夫 協力：宮澤賢治記念館



★これまでの連載記事はwebでご覧いただけます。
<https://www.nao.ac.jp/about-naoj/reports/naoj-news/milky-way-train/>

★本記事は「新校本宮澤賢治全集」(筑摩書房刊)を基礎資料・出典として作られています。

りゅうこつ区

南へ下っていく鉄道の車窓が再び明るい閃光に照らされた。いっちゃんをはじめ、多くの乗客が、その光を見て、また騒ぎ出した。

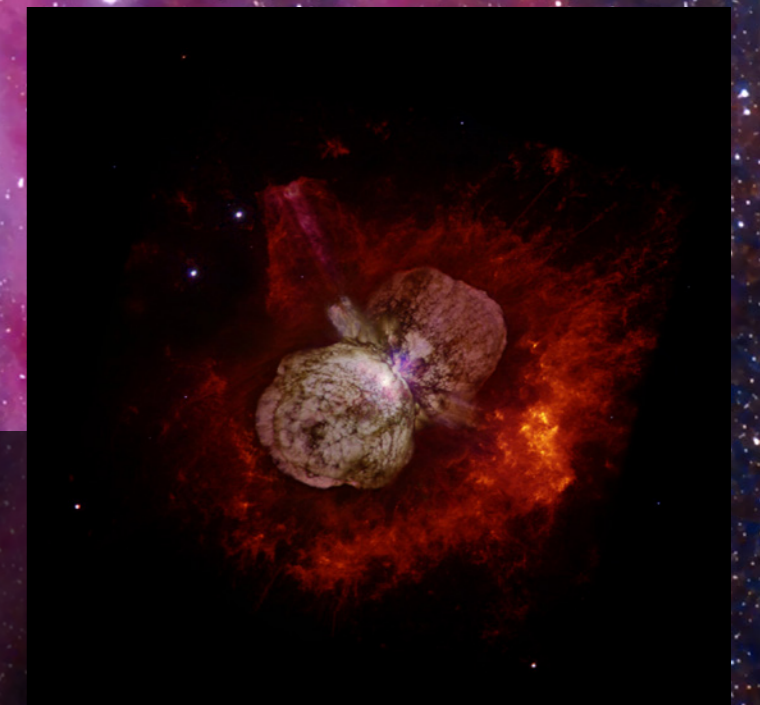
「こんどは何だ？」

いっかくじゅう座では V838 のライトエコーを眺めたばかりだったが、今回はそれとも輝き方が違っている。いかりをなくした船の船尾に輝きの正体はあった。その光をよく見ると、まるで人形のような形をした星雲に包まれているではないか。

「おお、これはホムンキュラス星雲かな？」

石川靖君が呟く。確かにそうだ。りゅうこつ座 η (イータ) 星を包み込んでいる星雲だ。人形型という意味でホムンキュラスと呼ばれている。その中心付近にある星、 η (イータ) 星が爆発したようだ。太陽の 100 倍以上の質量があるとされ、天文学的にはいつ超新星爆発を起こしてもおかしくはない、とされている。実は、この η (イータ) 星も連星である。伴星の方も太陽の 30 倍から 80 倍ほどと推定される連星系で、全体として太陽の数百万倍の明るさがある。19 世紀半ばには爆発的に増光して 1 等星となった後に、肉眼では見えなくなるほど暗くなったはずだ。20 世紀半ばから再び明るくなり始め、今世紀の明るさは 4 等台まで回復していたはずだ。それがこんなに明るくなるのは……、もしかすると 19 世紀の爆発を見ているのか、それとも未来の超新星爆発を見ているのだろうか。

すでに何が起こっても驚かない自分がいた。時空を超えて、いろんなものを見せてくれるのが、この鉄道なのだろう。そもそもが銀河鉄道の北回り路線である。しかも終着駅の南十字までは、もうすぐのはずだ。オリジナルでは、きらきら輝くケンタウルス座を通過するときに、「ケンタウルス、露をふらせ」だったところも、いっかくじゅう座を通り過ぎるときにクリスマスツリー星団となって、いっちゃんと呼ばれる少年が「ユニコーン、露をふらせ」にすり替わっていた。とすれば、みなそろそろ準備をするはず……と思うまでもなく、いっちゃんをはじめとする人たちは、なんだかいそいそと立ち上がって荷物を整理したりし始めている。あの台詞は誰が言うのか、と思ったら、いっちゃんたちを引率している外国人の先生だった。



りゅうこつ座 η (イータ) 星を取り巻く星雲とホムンキュラス星雲 (右)
ヨーロッパ南天文台 (ESO) にある超大型望遠鏡 (VLT) の赤外線カメラで捉えたりゅうこつ座 η (イータ・カリーナ) 星雲 (画面中央の明るい星がりゅうこつ座 η (イータ) 星)。膨大なガスや塵が広がり、その中から多くの星が生まれつつある (画像: ESO/T. Preibisch)。右は、 η 星の近くにひょうたん型に広がるホムンキュラス星雲。19 世紀半ばの大爆発の名残と考えられている (画像: Nathan Smith (University of California, Berkeley), and NASA)。



「もうじきサウザンクロスです。降りる支度をしてください」

たどたどしくも、いささか強い調子で皆に声をかけたのだ。私はその姿を見て、ああ、そのままじゃないか、と思った。とすれば、ここでいっちゃんはだだをこねるに違いない。案の定、いっちゃんは言う。

「僕もう少し汽車へ乗ってるんだよ」

いっちゃんのお姉さんは、そわそわ立って支度を始めた。けれども、やっぱり降りたくないのはオリジナル通りである。

「ここで降りなけあいけないのです」

先生はきちっと口を結んで、いっちゃんを見おろしながら言った。

「いやだい。僕もう少し汽車へ乗ってから行くんだい」

ああ、こんどは私の出番なのだろうな。実際には無駄なのかわかっていながら、私は言わざるを得なかった。

「そうだね、僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちね、どこまでだって行ける切符を持ってるから、大丈夫だよ」

しかし、お姉さんが寂しそうに反論するのはオリジナル通りであった。

「だけどあたしたちもうここで降りなけあいけないのよ。ここ天上へ行くところなんだから」

ああ、なんと言うことだろう。銀河鉄道の夜のストーリーが全く目の前で再現されている。冷静になればなるほど、頭がクラクラしてくる。憧れの賢治の作品の舞台に、何故か理由は知らないが、自らが立ち、まるでジョバンニそのものになりきっているのだから。

それに加え、これまでの出来事から推察すれば、今後の結末も予想できる。もうすぐ、皆、この汽車を降り、十字架に向かうことになるだろう。そして僕たちは二人だけになり、石炭袋が見えてくれば、そこで靖君は消えてしまうのだろう。私の旅は終わりに近付いている。果たして私は、現世の三次空間へと戻れるのだろうか。夢から覚めることがあるのだろ

うか。もしかすると、私自身もあの世へ旅をしているのだろうか。そんな不安が頭を一瞬よぎる。そして、靖君をちらっと見る。亡き友は、いったい何故、いま現れてくれたのか。靖君は、相変わらずすべてを悟ったように車窓を眺めて、遠くを見つめていた。やがてくる別れがもたらすであろう、すべての悲しみを包み込むような目だ。そうだった。彼は昔からそうだった。授業中でさえ、教室も窓からいつも外を眺めていたのを思い出した。だが、そのとき、突然、彼が呟いた。

「あすこにプレシオスが見える。あのプレシオスの鎖を解かなければならない」

「え？」

驚いた。銀河鉄道の夜は、何度も書き直されている。推敲を重ねる中、第三次稿でカンパネルラが消えた後、ジョバンニが現世に戻る前に登場するシーンがあって、そこではカンパネルラを探しても無駄だ、と説くブルカニロ博士という人物が登場する。ジョバンニは南天のマゼラン星雲を眺めながら、本当の幸いを探す決意を新たにする。その博士は、もともと自分の考えを人に伝える実験として銀河鉄道に彼を乗せたというような設定であった。しかし、最終稿ではこれらは見事に削除されている。それゆえ、現在刊行されているほとんどの銀河鉄道の夜の作品ではお目にかかれない台詞だ。驚いた私は、靖君が見つめる視線の先に目をやった。明るめの三角標がいくつか固まって輝いていた。そして思い出した。りゅうこつ座にはおうし座と同じような散開星団があることを。

「南のプレアデス……」

それは M45 プレアデス星団と似ている散開星団 IC 2602 であった。賢治が銀河鉄道の夜の第三次稿で用いたプレシオスは、一般にはプレアデスとされているのだ。旧約聖書ヨブ記の「汝プレアデスの鎖索を結び得るや」が由来とされており、その鎖を解くというのは難問を解決することを意味する。靖君は何を言わんとしているのだろうか。

プレシオス/プレアデス

プレアデス星団(すばる)の解説は連載六「おうしの停車場」を参照。

● みなみじゅうじ区

その言葉の意味を深く考える間もなく、乗客たちは立ち上がり始めた。南のプレアデスとは逆、汽車の進行方向からはキラキラした光が差し込み始めた。まるでカラフルなレーザー光線で演出されたかのように、天の川のほとりに色鮮やかな十字架が見えてきた。天の川の中に、すっと立って、その上には青白い雲が丸い環になって後光のようにかかっているのだ。灯台守も先生も、そして生徒たちも、まっすぐ立ち上がり、一斉にお祈りを始めた。特に先生は流ちょうな英語で賛美歌を吟んでいる。ハレルヤ、という言葉が妙に心に響く。十字架の光は車窓から差し込み、車内を明るくして、光が当たらないところが暗くなって見にくくなるほどであった。よく見ると、十字架の左側の横棒には先にはキラキラ輝く宝石のような光が瞬いていた。

「ありゃ宝石箱だな……」

靖君は納得したように呟く。先ほどの哲学的な台詞と異なって、こちらは現実的なつぶやきだったので、なんだか安心した自分がいた。南十字の β （ベータ）星のそばにある散開星団 NGC 4755、いわゆるジュエルボックスである。その輝きは美しかった。やがて汽車は多くの信号や電燈の灯りのなかで、次第にスピードを落とし、やがて十字架のちょうど真向かいで停車した。ああ、ここから天上へ向かうのだな。私はまるで人ごとのように、客観視していた。案の定、先生は

「さあ、降りるんですよ」

と、いっちゃんの手を引いて、出口の方へ歩き出した。そのお姉さんが、振り返って、靖君と僕に言う。

「じゃ、さよなら」

「さよなら」

靖君と私は答えた。他に何かかけるべき適切な言葉はあるだろうか。あるはずがない。ストーリーはすっかりわかっているはずなのに、私は泣きたい気持ちをぐっと堪えた。さよなら、しか言えないじゃないか。彼女もいかにもつらそうに眼を大きくして、もう一度こっちを振り返って、それから出て行ったのである。



散開星団 IC 2602

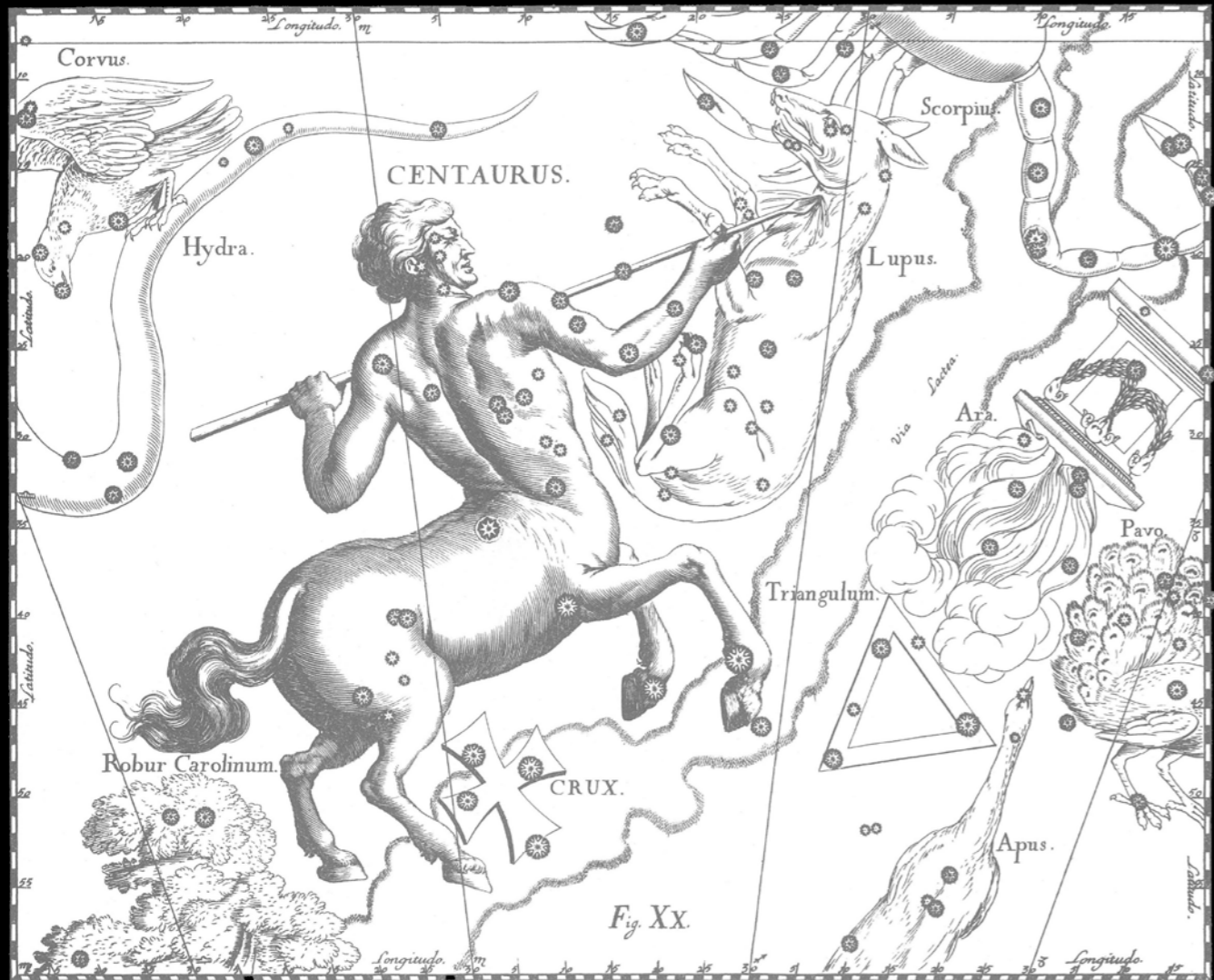
IC 2602は、りゅうこつ座の散開星団で、そのイメージが、おうし座のプレアデス星団 (M45) に似ていることから「南天のプレアデス」の名で知られている。プレアデス星団と同様に青白く明るく輝く若い星々からなり、もっとも明るい星 (画面ほぼ中央) は、3等星のりゅうこつ座 θ (シータ) 星である (画像: Tel Lekatsas)。



散開星団 NGC 4755

NGC 4755は、みなみじゅうじ座 β (ベータ) 星のすぐ近くにある散開星団。青白く光る若い恒星の集まりの中に、赤い巨星が輝く姿はたいへん美しく、その様子から宝石箱 (ジュエリーボックス) の名で親しまれている (画像: ESO La Silla Observatory)。下はその中心部のクローズアップ画像である (画像: NASA/ESA and Jesús Maíz Apellániz (Instituto de Astrofísica de Andalucía, Spain))。

散開星団 NGC 4755 拡大図



十字架/みなみじゅうじ座と石炭袋

上の画像は、中央にみなみじゅうじ座(α、βは1等星、γは2等星、δは3等星)、その左下の黒い部分が石炭袋(コールサック)、そして左側の2つの1等星がケンタウルス座のα、βである。石炭袋が黒い穴のように見えるのは、手前にある暗黒星雲(ガスや塵の集まり)が背景の銀河の星々の輝きを遮っているからである。下はヘベリウス星図のみなみじゅうじ座とケンタウルス座(オリジナルが反転像で描かれている)。かつては、みなみじゅうじ座はケンタウルス座の一部で、半人半馬のケンタウルスの四肢の先にそれぞれ1等星が輝く雄姿がイメージされていた。

車窓からは、乗客の皆がつつましく列を組んで、十字架の前の天の川のほとりで跪いて祈りを捧げる様子が見える。美しさと別れの悲しみが交錯する気持ちで眺めていると、川の水を向こうから一人の神々しい白い着物を着た人が手をのぼして、こっちへやってきたのだった。ああ、ここは天の川でもあるが、三途の川でもあるんだよなあ。そう思っているうちに、がらんとした車内を小走りに車掌が駆けていった。賢治車掌はまだ忙しそうだった。それもそうだ、この列車だけじゃ、あの震災の犠牲者をすべて収容できるはずがない。臨時列車がたくさん出てるんだろう。

硝子の呼びが鳴らされて、私が乗っている汽車は動き出した。オリジナル通り、銀色の霧が川下の方からすうっと流れてきて、十字架のあたりを隠してしまった。車内は静かな、そしてやや虚ろな暗い空間に戻った。

さあ、次は石炭袋か。そう思った。靖君がカンパネルラなら、そこで消えてしまうはずだ。改めて靖君を見ると、彼も悲しそうに私を見つめている。

「潤一君、ありがとな」

突然、靖君が言う。何故だ。どうしていま感謝されなくてはならないのか。むしろ感謝したいのは私の方だ。混乱する自分がある。靖君が言葉を継いだ。「こっちさ来ちまったから。半世紀ぶりに会えてよかった」

こんどは涙を堪えられなかった。目の前の世界が曇っていく。靖君は、どこから持ってきたのか、きれいなハンカチを貸してくれた。遠慮なく受け取って目頭を拭う。でも拭けども拭けども涙はあふれて止まらない。その一方で、言葉は全く出てこない。もうすぐ目の前から消えることがわかっているのに、である。うつむいてしまった私は、顔を上げれば彼がいないことがわかっているのだ。おそらく車窓を見ていたであろう彼は、カンパネルラの台詞を吐いた。「あ、あすこ石炭袋だ。そらの孔だよ」

予想は当たった。顔を上げると、すでに靖君はいなかった。「ただ黒いびろうどばかりがひかって」いたのだ。全くオリジナル通りじゃないか。半ば呆れながら、自分も叫ばなくてはいけないのか、と思った。実際、叫びたい気分だった。まるで鉄砲玉のように立ち上がり、「誰にも聞えないように窓の外へからだを乗り出して力いっぱいほげしく胸をうって」

叫ばなくてはならない。そうすれば、この夢から覚めて三次空間に帰れるはずだ。

そう思って窓の外に身を乗り出したとき、意外なことに気づいた。線路が複数あるのだ。銀河鉄道はもしかして単線ではなく、複線だったのか。そう思った瞬間だった。進行方向と逆にこちらに向かって列車が近付いてきた。オリジナルの銀河鉄道、はくちょうの停車場から、わしの停車場を過ぎ、さそり座を経て南十字に向かう南回り路線である。向こうはこれから終着駅に着くのだろう。たくさん乗客が乗っているように見えた。すれ違うところで身を乗り出しては、危なかりそうと思ひ、車内に身を引いた。そしてすれ違う車窓を眺めていると、ずいぶんと車両が長い。最初の車両には窓際に赤ちゃんがいた。なんだか親父に似ている人に抱かれていた。まだ涙でよくわからない。ずいぶん似ているなあ、と思って通り過ぎるのを眺めていると、次の車両には幼稚園くらいの子が窓から外を覗いている。あれ？

「まさか……」

あまりのことに全く声も出せなかった。さらに次の車両では高校生くらいの子が、ややほにかむような笑顔で、こちらをじっと凝視しながら通り過ぎた。列車はそれほどのスピードでもないにもかかわらず、それが一瞬に思えた。もっとゆっくり走ってくれ。心の中でそう叫ぶ。そう思っていると4両目には大学生くらいの大びた女性になっていた。その顔を見た瞬間、先ほどの涙に追い打ちをかけるように、さらに涙があふれ出た。間違いなく、あれは亡くなった娘の真里奈だ。赤ちゃんから成長する姿を見せてくれているのだろうか。いったいなぜ、向こうの車両に乗っているのか。なぜこっちではないのか。こっちだったら、靖君のように話もできたのに。そんな思いがこみ上げてきたのだが、あまりのことに体は全く動かず、身を乗り出して叫ぶことさえできない自分がいた。そして最後の車両には、亡くなる直前の真里奈が犬を抱きながら、かすかに笑っているように見えた。楽しそうでも、悲しそうでもない、その微妙な笑顔に、先ほどの靖君の言葉が重なる。確かに、最後となった家族旅行の山の上の宿で、

それまで怖がって一度でも抱いたことのない大型犬を抱いて、とても嬉しそうにしていた。しかも、それもあんな大型犬だったはずだ。この列車の旅路の中で停車した、おうし座の駐車場の近くの闘牛場で、オリオンが連れていた犬が1匹だけだったのは、そのせいだったのか。あるいは、当時の写真を眺めていた私自身の記憶が見せてくれた幻影なのだろうか。亡くなってからほとんど夢にも出てきてくれない娘だったのに。どうして会話さえできない南回り列車に乗っているのか。

逆縁ほどつらいものはない。それを身をもって体験した。だからこそ、靖君が呟いた「親父には悪いことしたっけなあ」という言葉に、「そんなこと、ねえよ」と言えたのだ。理由はどうあれ、子供を先に死なせてしまったことに誰だって自責の念にかられ、苛まれる。靖君が、亡くなった娘に合わせるため、私をこの列車に誘ってくれたのか。あるいは賢治車掌が、誘ってくれたのか。この体験そのものが私の希望を実現する、いわば脳内変換された幻影なのだろうか。

遠ざかっていく、すれ違いの南回りの汽車を呆然と見送りながら、私はやっと体を動かすことができた。ずっと立ち上がると、車掌を探そうと思った。お願いするんだ、向こうの列車に乗りたくい。娘と話をしてほしい一心だった。そんなことはできないかもしれない。しばらく停車場もないし、終着駅の南十字を既に過ぎていた。もう三次空間に戻る頃合いだろう。だが、もし向こうの汽車に乗れたら、靖君のように会話ができるかもしれない。一言でもいい。一目でもいい。一瞬でもいい。そう強く思った。車掌を探しながら、がらんとした車両を駆け抜けた。3両ほど離れた車両に賢治車掌はいた。それも他に3人の仲間と共に座っていた。みな少し見覚えのある顔であった。驚いた。アザリアの面々のようだった。不思議にも一人だけ年老いている。皆、亡くなったと

きの年齢で止まっているのだろうか。とすれば、その老人はアザリアの中で唯一長生きした小菅健吉だろう。河本緑石は、ほぼ賢治と同時期に亡くなっている。しかも、銀河鉄道の夜の最後の場面、カンパネラが川に落ちた友人を助け、自分が犠牲になるというシーンと全く同様に、海水浴場で水泳訓練中、溺れた同僚を救助した後に事故死している。賢治よりも2か月早くこちらに来たはずだ。もう一人、賢治に大きな影響を与えた保阪嘉内も彼らの4年後に亡くなっているの、やはり同じような年齢に見える。談笑していたのか、みな微笑んでいた。なんだか腹立たしくもあって、近付いていくと、何を言わなくても、すべてわかっているという風に賢治車掌は立ち上がった。息を切らしている私を見つめ、無情にも悲しげにうつむいたまま、帽子を少し傾けて呟いた。

「それはできねえ相談だなし」

そう言いながら、あの切符かもしれない星座早見をいつの間にか手にしていた。それをぐるぐると回し、目盛りを合わせて押しつけるように渡してきた。その目盛りは12月10日、娘の命日だった。目盛りを見る視界が涙で曇ってくる。悔しき、悲しき、そして会えない娘に一瞬でも会えた嬉しさも混じっていた。おそらく自分の願望が脳内で変換されて、こんな夢を見させてくれたのだろう、という思いは汽車に乗ってからずっと離れなかった。しかし、それなら、なぜ靖君ではなく、娘がこの北回り路線の列車に乗ってきてくれればよかったのに。なんだか中途半端な思いを抱えながら、星座早見を眺めていると、世界がぐにゃと曲がり始めた。ああ、乗車したときと同じだ。夢から覚めて三次空間に戻るのか、と思った。もう少し、こちらにすることはできないのだろうか。娘に会いたい。そう思いつつ、働かなくなる脳が休めと言ってくる。悲しいのにもかかわらず、急激に眠くなって世界が闇へと溶け込んでいった。

アザリア

『アザリア』は、宮沢賢治が盛岡高等農林学校に在学中に学友と刊行した文芸同人誌(1917(大正6)年刊行)。この制作を通じて親しくなった保阪嘉内、小菅健吉、河本義行の3人とは、かけがえのない友となった。



「渡部さん！ 渡部さん！ わかりますか？」

遠くから声が聞こえる気がした。うっすら目を開けると、ベッドの上である。なんだ、どうした。ここは、どこだ。白い壁や柱はぐにゃと曲がってはいなかった。白いカーテンが閉められ、そこから日の光は漏れていない。夜なのか……。

「あー、よかった。おーい、渡部さん、気がつかれましたか？ 大丈夫ですか？」

ばたばたと人が入ってくる。

「あんなところに倒れてたんですから……。いったいどうしたんです？」

こちらが聞きたい。みな誰だ？ いったい、どこにいるんだ。少なくともあの鉄道には乗っていないようだった。

「わかりますか？ 木村記念館の前で倒れてたので、救急車で運ばれたんですよ。なにより、気がついてよかった」

あまり発語ができなかった。なんとなく、みな同

僚であることはわかってきた。それにしても自分が経験したことを言っても誰も信じてくれないだろう。諦めてなすがままに。というよりも話す気力もなかった。あの鉄道の中でむやみに走ったりしたせいかもしれない。あの列車で見聞きしたすべてのことに論理や筋道は通じないし、いろいろな時空を超えた断片だけがつながっていたりするの、さすがに不完全四次元空間のなせる技なのだろう。考えてみれば人生なんてものは、そんなものなのかもしれない。そう思いつつ、心配してくれた同僚に感謝しなくてはなるまい。皆、ありがとうね、と。うまく言えないのは靖君と同じだなあ、と思った。

白衣を着たお医者さんとおほしき人がやってきた。脈やら点滴やらを確認しながら、声をかけられるのだが、まだ発語できないので、問いかけにうなずいたりしているうち、枕元の机の上に、あの星座早見が置かれているのを見つけた。そのまま握りしめて倒れていたのだろうか。よくよく見ると、その表面に新しく、書き付けたような文字が見えた。

「そらにはちりのように小鳥がとび……」

完

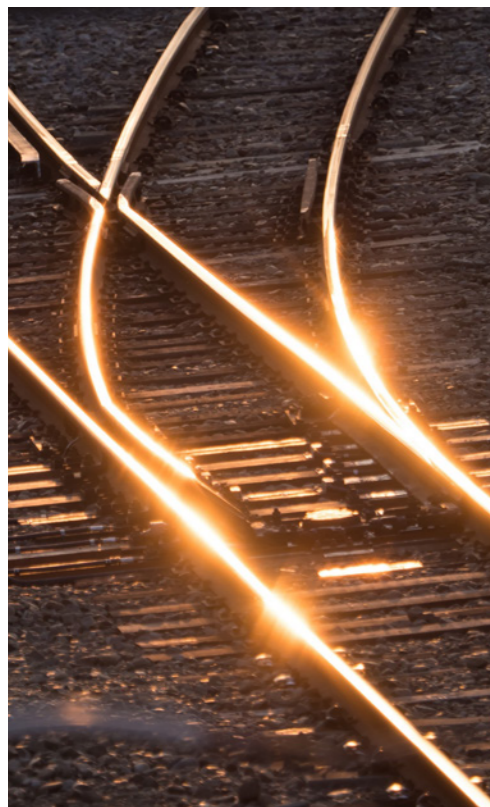


岩手山と北天の星空（日周運動）



乗り換えのご案内

銀河鉄道南回り線（南天線）の運転は、ひとまずこちらで終了です。長らくのご乗車、まことにありがとうございました。なお、このあとは、銀河鉄道支線の北辰線にお乗り換えいただけます。発車までご乗車になってお待ちください。



「みなみじゅうじ座(南十字星)」は、日本では八重山諸島を除いて見ることができませんが、春の星座として知られる「からす座」が南中するころ（上写真）に、その地平の真下に十字が立ち上がります。右はヘベリウス星図の南天星図（オリジナルを反転させて実際の星空と合わせた）で、●色が「みなみじゅうじ座」、●色が「からす座」です。終着駅のみなみじゅうじ区から乗り換えとなる北辰線は、「からす座」方向に北へと延びる支線となります。

